



YAMAGA

近代の山鹿の
偉人たち
シリーズ

023

生涯を中国問題の解決に捧げた哲人（一八九五～一九七三）

なか やま
中山
まさる
優

大正から昭和にかけて、日本と中国の關係が不安定な時代、中山優は、両国の平和のためにさまざまな問題の解決に力を尽くしました。

時の総理大臣の「近衛三原則」の執筆に携わり、満州国の建国大学首席教授や特命全權公使を歴任し、日本と中国の間になくはならない存在となりました。

孔子・孟子の道を説く儒学者の一面を持つ優を尊敬する人は、日本・中国だけでなく香港・台湾・韓国などにも数多く、彼の葬儀には国内外から大勢の弔問客が訪れました。

ある新聞人は、「中山先生こそ本当の人間国宝である」と評しました。そのような人格と功績が評価され、昭和四十五年、鹿本町名誉町民に推挙されました。

生いたち

中山優は、明治二十八年（一八九五）十二月十八日、鹿本郡来民町（現山鹿市来民）笹本に、中山惣平・ハツの次男として生まれました。父惣平は、闊達な気性で世話の行き届く人でした。当時の町長が、その功績を讃えて生前に中山家の庭に記念碑を建ててくれたほどでした。

優は、地元の来民小学校を卒業後、大正二年（一九一三）県立鹿本中学校（現在の鹿本高等学校）を卒業し、同年九月から翌年の秋にかけて、葦北郡の佐敷小学校の代用教員を勤めました。

同小学校の勤務はたった一年間でしたが、社会人になって初めての赴任となった同校での経験は、大切な思い出として優の記憶に残りました。受け持った子どもたちや、地域の人たちとの温かい交流は、優にとって大切な財産となったようです。

優は、「代用教員としてここに来なかつたら、自分は今とは別個なものとして形成されだろ。」と書いているように、佐敷小学校時代の生活は、優の生涯の心がけに大きな影響を与えたようです。

後年、優は帰郷のたびごとに佐敷を訪れ、いつも大変歓迎されました。担任した生徒の中には、佐敷の町長や県の教育委員長になった人もいます。

優の幼いころの逸話をひとつ紹介します。村中の川で馬の体を洗っていた時のことです。（馬は、当時の農家にとって非常に大事な役割を果たしていました。人や物の運搬や、田んぼや畑を耕すのに無くてはならないもので、今の自動車とトラクターを足し合わせた働きをしていました。）

そこを通りかかった村の青年が、「お前は惣平の息子か」と、年下の彼を見下すような失礼な呼びかけをした時、優は「お前は

〇〇の息子か」と、やり返したという話を聞いたことがあります。



若き日の写真

東亜同文書院時代の優

大正四年（一九一五）九月、優は、当時中国の上海にあった東亜同文書院 政治科に入学しました。

東亜同文書院は、当時第一高等学校（後の東京大学）と並び称せられるほど合格するのが難しかったそうですが、大変ユニークな学校でした。この学校を創立したのは、根津一という人です。この学校が創られた背景を説明します。

中国は、清時代の末期、アメリカやヨーロッパ諸国の圧迫を受け、更に明治二十八年（一八九五）日清戦争で日本に敗れて、国の力が衰えていました。根津院長は、日本が中国と提携・協力して共に国を発展させようと考えました。そのためには、多くの優秀な人材を育てることが必要だと考え「東亜同文書院」が創られたのです。

また、明治の初めから西洋の科学技術の追求にのみ走り過ぎて、軽薄になりかけている日本人に、古くから中国で大切にされてきた

儒学（『大学』『論語』『孟子』など、人間として一番大切な心のあり方、持ち方を教える学問）を学ばせたいという意図もあったようです。

書院では中国の人には、わが国を通じて西洋の科学を学ばせるため日本語で授業をし、日本人には中国語で学ばせるという授業をしました。

優は、そういう学校に学んで、根津院長の教えを生涯大切にしましたが、在学中は決して模範的な学生ではありませんでした。それどころか二度も停学になり、授業日数が足りなくなって卒業証書をもえませんでした。

「あまり授業には出ず、酒を飲んだり、テニスをしたり、上海の街に先輩を訪ねたり、全く厄介な生徒だったに違いない。」（「根津三州先生と落第生」と自分で書いています。けれども、別のと

ころには「教室には出なかつたかも知れぬが、図書館の本を多く読んだ点では一番だつたかも知れぬ」（「読書の楽しみ」とも書いています。

そのような優の将来を心配した先輩が、根津院長に相談に行きましたが、院長は、「中山優は、卒業には縁のない男だ。」と言って、修了証書というのを書いてくれました。院長は、「中山は、卒業以上の実力がある男だ」と、当時の朝日新聞の上野理一社長に紹介してくれたのです。



東亜同文書院

朝日新聞社時代

大正七年（一九一八）優は、院長のはからいもあって同文書院を修了後、大阪朝日新聞社に入社することができました。そして、同年（一九二二）中原智恵と結婚しました。

優は、ここで緒方竹虎、中野正剛という得難い先輩の信頼を得ていましたが、胸を患い三年でここを去りました。大正十一年（一九二二）から昭和二年（一九二七）まで五年間療養しています。

緒方は、優の人柄と才能を惜しんで、病気が治るまで新聞社をやめないで、休職扱いにしてもらうように勧めましたが、優は、「実際に働いていない者がそういうわけにはいかない」と朝日新聞社をやめました。

緒方は、のちに東久邇内閣・吉田内閣の大臣、自由党の総裁となり、総理大臣に選ばれそうな直前に病死します。緒方の名前が知られるのは二、二六事件の時、朝日新聞社を襲った軍人のピストルの前に立ちはだかつた時からです。

中野正剛は、代議士になりますが、東条総理の政治を批判し続け、憲兵監視の自宅で自刃します。優は、こういう人たちから認められたのです。

優は、ふるさと熊本の実家に帰って父の隠居場として建てられていた離れの家に妻や幼かつた子どもと住んでいました。当時、結核は伝染する死に至る病と恐れられていましたから、村の人は優の住む離れに近い垣根のそばは避けて通っていたという話を聞いたことがあります。

けれども、この病気を克服したことは、優にその後の困難に堪え、何ものをも恐れない強い気持ちを与えてくれたようです。

病氣療養の間も、優は中国問題に関する論文を書き『支那』という雑誌に発表しました。そして、外務省情報部に招かれることにな

りました。

あまり知られていませんが優は、療養中の昭和元年（一九二六）に、放浪の歌人「宗不旱」の仲人を務めています。（宗不旱の歌碑は、鹿本総合支所前などに建てられています。「近代の山鹿の偉人たちシリーズNo.9」）。

外務省嘱託時代

療養中も書き続けた中国問題に関する評論が評価されて、昭和五年（一九三〇）、外務省の嘱託しよたくとして続けて勤務することになりました。外務省時代、優は中国各地を巡りめぐ、多くの中国の人たちと知り合うことができました。このことは、その後の優の人生、とりわけ日本と中国の友好関係のために働く上で大変役に立ったと思われます。

当時は、昭和九年（一九三四）九月の柳条湖の爆破事件で、日本と中国の緊張が高まり、十二年（一九三七）の盧溝橋事件るくわきょうで両国が取り返しのつかぬ戦争（当時、日本では「支那事変」と呼ばれていました。）が起きました。そういう時代ですから、優は、事変の拡大防止のために心を砕きました。

昭和十二年の夏、優は選ばれて当時の内閣総理大臣、近衛文麿このえふみまろの演説の元になる原稿を書きました。その後も、日本と中国が戦争をしている時代に、両国の関係改善に苦慮する近衛総理を助け、公におおげ発表する文章や、演説の元になる原稿をしばしば依頼されます。

建国大学教授時代

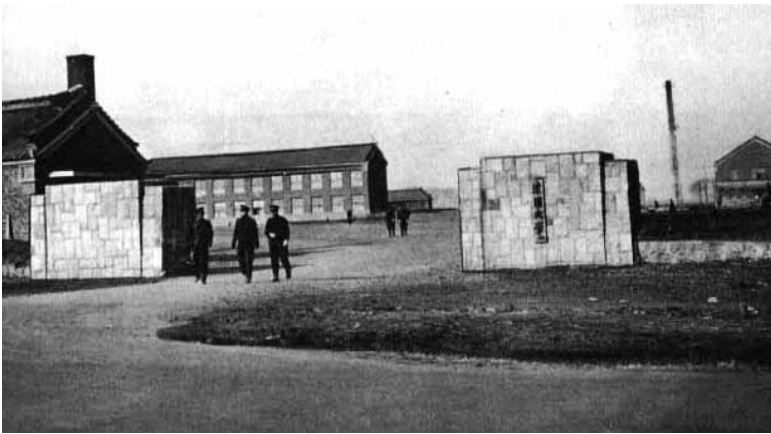
昭和十三年（一九三八）優は招かれて、満州まんしゅう（今の中国の東北部。戦後は使わなくなった地名）の建国大学けんこくの教授となりました。優が四十五歳の時のことです。

建国大学に勤めることになった優は、「東洋政治論」という講座を受け持ち、多くの学生たちを育てました。かたわら、日本や中国を含む東洋の諸国家・諸民族が協力し合って平和と繁栄を目指そうという「東亜連盟」の運動にも参加しました。

けれども建国大学を最初創つくった人の理想は、あとから来た心ない人たちのために次第に失われていきました。また「東亜連盟」

の運動は、東条政権の弾圧で解散を余儀なくされます。

昭和十八年（一九四三）三月、優は尊敬する同僚、作田莊一（建国大学副学長）のあとを追うように、建国大学を去りました。



建国大学

満州国の特命全権公使に

優は、建国大学を去って東京の狛江の自宅に帰ったのですが、昭和二十年（一九四五）の正月、もう一度戦争を拡大させないために働く機会がやってきました。

今度は満州国の「特命全権公使」という肩書きで、南京へ行くことになったのです。当時、中国では共産党が台頭しつつあったのですが、日本の前面の敵は重慶の蒋介石政府でした。

南京政府は、蒋介石と別れた汪兆明派の政権でしたが、重慶政府にも日本と和解しようという兆しがあり、南京には重慶から来ている人々もいました。それが中国に親しい人たちが多い中山優が選ばれた理由でしょう。

そのいきさつは、東久邇総理大臣の日記や、当時、満州で要職にあった星子敏雄氏の手記、外務省の終戦時の記録などに伺えます。

（星子敏雄氏は、鹿本町庄の出身。帰国後、熊本市長を四期十六年も務めました。「近代の山鹿の偉人たちシリーズNo.17」）
中国の人たちが、優を歓迎してくれたこと、また、特命全権公使に就任してからの働きに対する日中両国人の信望が大きかったことなどは、大使館参事官として同行した竹之内正巳氏の文章（南京回想記…昭和四十六年六月）に書かれています。

けれども、このような優の懸命の努力も、当時の軍部や東久邇内閣の次の内閣の逡巡で実りませんでした。

昭和二十一年（一九四六）の春、南京から上海を経て帰国する優の一行を、重慶の中国軍兵士たちは丁寧に見送ってくれたそうです。上海の束の間の仮住まいで優は、中国に古くから伝わる四書の講座を開きました。（四書とは、孔子に始まる儒教で大切にされた『大学』『中庸』『論語』『孟子』のことです。）

南京赴任の直前、優には不幸な出来事がありました。

「水清き多摩のほとりに生まれしかば泉とこそは愛でにけるかも」…誕生の時、こう読んでかわいがった次男泉（当時中学二年生）が前年から患っていた病気のため、二十年一月十九日に亡くなったのです。南京のひとりの宿舎で遺影を前に詠まれた痛哭の歌二十首が残されています。

蔵居良造氏の中山優評

同文書院の同窓で生涯優と親しかった、朝日新聞の蔵居良造氏は、昭和四十八年六月一日の「広報かもと」に優について左のように書いています。

「天真爛漫、天衣無縫」という言葉がびたりと当てはまる人で、どんな立場の人も、思想の違う人も、先生に会えばたちまち好きになる。先生も決して人を分け隔てしないし、人を憎まない。先生にとってはどんな高官も貧乏な人も一律に人間であって、若い純真な人たちが集まったのもその人柄に惹かれたためであったが、近衛文麿公や中野正剛氏らの*帷幄に参画したのも中国問題に関する卓越した見識とともにその高邁な人格に負うものであった」
*帷幄：帷は垂れ幕、幄は引き幕。帷幄は作戦を立てるところ。「帷幄に参画する」は、他の人は入れない機密の大切な相談に加わること。

近衛文麿公は、昭和二十年に亡くなりましたが、残された近衛家の人々は優を最後の病床まで見送りました。長男の文隆氏がシベリアの抑留地で優を懐かしんだ様子は三宅隆氏の「白夜」（「中山優選集」に併録）に記されています。

朝日新聞の中野正剛・緒方竹虎氏。建国大学では「親子ほど年の離れていた」高名なドイツ文学者登張竹風先生。

当時の日本に対立していた中国の西方から来ていた鮑明鈺氏、

朝鮮の崖南善氏、当時日本に違和感を抱いていた人たちも、のちのちまで優の友人になりました。

第二次大戦後の優・亡くなるまで

こんな具合でしたから、第二次大戦後、職を離れた東京狛江の中山優の住まいは淋しくなるどころか益々賑やかでした。

彼を慕う建国大学の卒業生、同文書院の後輩たち、意見を求めてやってくる代議士、学者、作家、中国の人、韓国の人。

そんな忙しい日々でしたが、優は周囲の希望で「四書」特に「孟子」の講義を始めました。初めは毎日でしたが受講者が優の多忙を見かねて、第三日曜日の午後だけということになりました。

講座は、昭和四十七年十月、優が最後となる入院の直前まで続きました。優の講座に関しては、もう一度蔵居氏のお言葉をお借りしましょう。

「常に、道を求めてやまない人であるが、決して堅苦しい道学先生ではなく、常に柔らかく温かい雰囲気にもまれていて接する者の心をほぐしてくれる。」

そんな講座の席に、ある日優の故郷の青年が、自作の「高村光太郎」論を持って来ました。優は、一読して顔をほころばせ、青年を誉めました。このように、志のある若者を元気づける優の様子を吉田松陰にたとえる人もありました。

そんな日常でしたが、優は昭和三十六年四月から四十六年四月まで亜細亜大学に勤めました。彼を招いたのは昭和二十年の元文部大臣太田耕造氏です。

昭和四十五年（一九七〇）優は、郷里の鹿本町の名誉町民に推挙されました。

昭和四十八年五月一日、優は喉頭がんで入院していた慈恵大病

院で亡くなりました。青山斎場で葬儀委員長の田村先生は、挨拶の冒頭「日本は、大黒柱を失った」と述べられました。優の死亡は、郷里鹿本町の「広報かもと」六月一日の一面全部を使って紹介されました。

優は、中国に学び、儒学の精神を大切にしました。中国と日本が武力で戦っている困難な時代、王道（力ではなく、真心で思いやりを持って相手に接する姿勢）を大事にして、中国との交渉や、アジア諸国との連携を図りました。

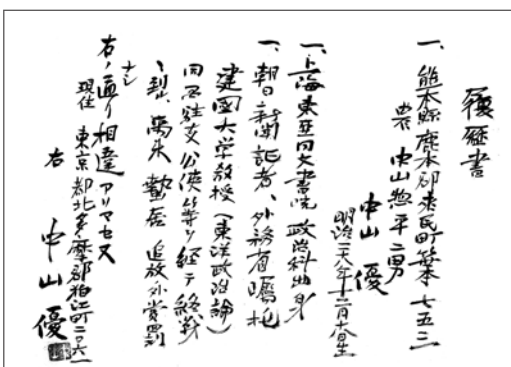
また、大学や自宅では、四書を通してその精神を伝えることに努めました。儒学は、江戸時代に特定の人だけのものではなく、庶民の生活の中で家族や友だちなど周りの人に対する心づかいに良い影響を与えました。けれども、第二次大戦が終わると、

アメリカの意図的な政策のせいもあってか、加えて経済成長の結果の良くない面も作用したのか、美風は次第に失われていきました。

優は、昭和四十七年暮れに出版された「選集」の序文に、「物質的に空前の豊富さを示す今日こそ、同時に精神的には破局的空虚さ



晩年の中山優夫妻



これは亜細亜大学に提出された履歴書です。



「中山優選集」

中山優の本

を伴っている。」と記しましたが、それからまた、四十年経ってタガがはずれた日本の、日本人の悪しき面、目の当たりにしておりです。すでに明治の頃、西洋に追われて軽薄になっていく日本人を心配された恩師根津先生が今をご覧になったらどのようにおっしゃることでしょうか。

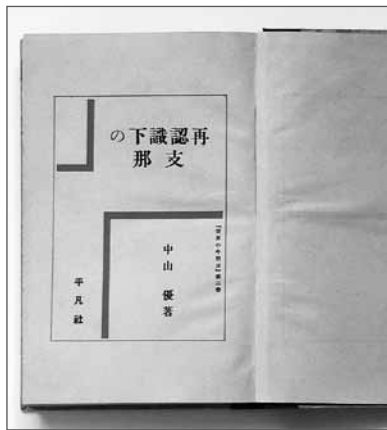
「中山さんは、その生涯を東洋の豊かな心で生き抜かれた。星子敏雄氏は、優の没後このように言われました。」

また、「望郷蘆行状記」の小山寛二氏は、新聞に優の生涯のあらましと葬儀の様子を伝えた後に、作家海音寺潮五郎氏（NHK大河ドラマとなった作品に「天と地と」「平将門」がある）が、「中山先生は、真の儒者である」と評されたことを記して、儒者

とは、知識の上の儒学ではなく、体に道を体した誠の人という意味であると説明しておられます。

海音寺氏は、自分の作品の最高の読者だとして新しい作品が出版されるたびに、中山優に贈られたそうです。なお、望郷蘆先生が懐かしんだのは、自分がそこに生まれ育って、少年時代百姓の仕事もした故郷の農村に違いありません。その農村も今……。

中山優についてまだまだ書きたいこと、書かねばならぬことがたくさんありますが、彼の遺風を継ごうとする人たちによって生れた「東洋倫理研究会」が、今も熊本市で続けていることを記してひとまずの終わりにしましょう。



「再認識下の支那」



「対支政策の本流」



「中国の素描」



「支那論と隨筆」

年表 History

明治二十八年 (二八九五)	鹿本郡来民町笹本にて中山惣平の次男として生まれる。
大正二年 (一九一三)	三月、県立鹿本中学校を卒業 同年九月より葦北郡佐敷小学校で代用教員になる
同 四年 (一九一五)	九月、上海東亜同文書院入学
同 八年 (一九一九)	三月、同文書院政治学科修了 四月、朝日新聞入社
同 十年 (一九二二)	中原智恵と結婚
同 十一年 (一九二二)	病氣療養（昭和二年まで）
昭和元年 (一九二六)	歌人宗不早の媒酌人を務める
同 五年 (一九三〇)	外務省嘱託となる
同 十一年 (一九三六)	当時の首相の「近衛声明」の演説草稿を執筆
同 十二年 (一九三七)	近衛首相の日比谷公会堂での演説原稿を執筆
同 十三年 (一九三八)	建国大学教授（東亜政治論）に就任
同 十八年 (一九四三)	同大学を辞任
同 二十年 (一九四五)	満州国特命全権公使として南京に赴任
同 二十二年 (一九四七)	上海より帰国
同 二十六年 (一九五一)	東京の自宅で中国古典の講読会開始 （昭和四十七年まで続ける）



廣報かもと 記事（昭和48年6月1日号）

同三十一年 (二九五〇)	亜細亜大学教授に就任
同四十五年 (一九七〇)	鹿本町名誉町民に推挙
同四十六年 (一九七一)	亜細亜大学を辞任
同四十八年 (一九七三)	五月一日、永眠 享年七十七歳